

育成人材目標

日本経済新聞の報道（6月8日付）によると、「文部科学省は、高校に具体的な教育目標の設定と達成度評価の公表を求める制度の検討を始める。」とされています。

その理由として同紙は、「高校生の7割が普通科に通う中、学力や進路希望などの実態は多様化。大学受験以外の目的意識が曖昧になり、中堅校を中心に学力低下も懸念されている。高校ごとの位置付けや目標を明らかにして、実態に沿ったカリキュラム作りを促し、学力を底上げする。」ためとしています。

文部科学省では、従来の教育目標は抽象的なものが多かったことから、今後は、生徒層の実態に応じて、各高校で目指す人材像を明確化することとし、その参考例として

- ・ 社会の基盤を担う人材を育成する学校
- ・ 工業科、商業科など専門的な職業人を育成する学校
- ・ 難関大学を目指すなど、社会のリーダー層を育成する学校
- ・ 芸術・スポーツなどの特別な才能を伸ばす学校
- ・ 不登校などの経験を持つ生徒を受け入れる学校

を示しています。

文部科学省では、こうした考え方について年内にも結論を出すとしています。が、高校を類型化することに対しては以前から学校の「序列化につながる」と反対の声がありますので、今後の議論が注目されるところです。

さて、今何故、文部科学省は「高校ごとの教育目標の明確化」をいい出したのでしょうか。背景として考えられるのは、高校生の学力低下が大きいと思います。

今や高校は実質全入の時代になっていますが、中でも、普通科には7割の生徒が入学しています。それだけ大学進学を考えている生徒や保護者が多いという事を示していますが、「大学に進学するため、取り敢えず普通科を選択している」という生徒も多いと思われます。

このため、同じ普通科といっても、生徒の中には、目標を持ってしっかりと

勉強している生徒がいる一方、はっきりとした目標も持てず勉強に集中できていない生徒や、そもそも高校生にふさわしい基礎学力を持っていない生徒も多数存在しています。

普通科は、もともと農業高校や工業高校と異なり特色を出すことが難しい面がありますが、それでも、それぞれの学校では、地域や、入学する生徒の状況に応じ特色ある学校づくりに努めて来ています。

また、道教委としても、医進類型校の指定や入学試験における選択問題の導入などにより、より特色のある学校づくりを推進して来ました。こうした現状の中、文部科学省が示している参考例は余り参考になるとは思えませんが、教育課程が弾力化され特色あるカリキュラム作りがやり易くなるなら、歓迎すべきことでしょう。

ただ、高校生の学力不足問題は、単に高校教育だけの問題ではありません。幼児教育から初等中等教育、更には高等教育へと接続する中で起こっている問題と考えるべきで、大学の入試制度をどうするのかという事まで含めた、総合的な対策が必要だと思っています。

また、難関大学と社会のリーダーとを結びつけて考えているのを見ると、文部科学省は変わっていないなーと感じます。更に、「不登校などの経験を持つ生徒を受け入れる学校」といういい方も、不自然です。

私は、高校教育（高校だけではありませんが）において重要な事は、一人ひとりの子ども達が学校を卒業した時に、自分の目標に向かって社会の中でしっかりと生きていける力を身に付けさせる事ではないかと考えています。

自分の人生をどう考えるか、人としてどう生きるか、社会の中でどのような役割を果たしていくか、その事を自ら考え行動に移していく、そうした力を育てていくキャリア教育の充実には、もっと力を入れて行くべきでしょう。

（塾頭 吉田 洋一）